「国語の力」の成立過程 XVII

―国語教育学説史研究―

野地潤家

一八

「国語の力」（大正11年5月8日、不老閣書房刊）の第五章「国文学の体系」には、一三「何を読むべきか」が説かれ、一四「如何に読むべきか」が述べられている。

まず、一三「何を読むべきか」については、つぎのように述べられている。

こゝに一挿話として、試にイギリスの読者に推奨する目的を以て図書出版・販売者等の助言を得て編纂せられたる小冊子の中から、流行文学の名を挙げて、既に日本語に飜訳せられた我々の所有する世界的文学と比較して見たい。我々がいかに広い世界的文学の読者であるかゞ、推測せらるゝであろう。

1　ベルハーレン、メーターリンク。これ等の名は苟も文学に興味をもつ人のよく知るところであって、特にメーターリンクの飜訳は二種類の叢書の外、単行本にも雑誌にも、童話劇にもよく人の知るところである。ベルハーレンと欧州大戦中急に名高くなったカンメールツの二人はメーターリンクほど多数の人に知られて居ないとしても、その作の一二は必ず文学の愛好者の目に触れたことであろう。

2　フランス文学に就いては、主に小説作家を挙げて居るのであるが、又ラシーヌ、コルネーユ、モリエール等をも逸して居ない。ユーゴー、フローベル、モウパッサン、ゾラ、アナトール・フランス、バレー、バザン、ダウデー、レネー、ミラン、ピエル・ロチ、ロマン・ローラン等の名は熟知するところであり、その翻訳又は翻案は頗る多い。最近に至りて、ユーゴー全集、ゾラの『巴里』（ルルシヤン）『銭』、又抄訳ではあるが『労働』（トラバイユ）、特にロマン・ローランの『ジャンクリストーフ』の現われたことを悦ばねばならぬ。フランスの自然主義派の諸作家の現代小説に於ける影響は特に興味ある研究題目であって、この方向に連続して世界文学の概念に導かれ得るであろう。（吉江喬松氏「仏蘭西文学印象記」『新潮』参照）

3　ロシヤ文学と音楽とは、特に芸術を愛するものの心をひきつ

ける力をもって居る。トルストイ、ツルゲネーフ、ドストエフスキー等の翻訳は全集の外にもかなり多数に上ることであろう。特に長谷川二葉亭の筆に成れるものは、ロシヤ文学を最初に日本文学に連ねたものであって、明治三十七八年以後ロシヤ文学の翻訳はます〳〵盛に行われ、以上の人々の重なる作品は概ね人の知るところである。ゴゴル、プーシェキン、アンドレエフ、ゴルキ、クープリン、ゴンチャローブ、レルモントフ、ソリュグーブ、チエコブ等の作品の多くも伝えられた。現代文学に於けるフランス文学とロシヤ文学との影響の大なることは、いふまでもないことであるが、ロシヤ文学の内に潜む思想の深刻なる感化に就いては、現代文学研究者の広汎なる観察を要するところであって、トルストイの人道的精神、ドストエフスキーの『罪と罰』の深く人心に徹する力、ゴゴル、チエコブの苦味等の影響は、単に外国文学の翻訳というような方面にのみ止まるものではない。クロポトキンの『ロシヤ文学に於ける理想と現実』の翻訳も既に現われたかと記憶する。（大泉黒石氏『ロシヤ文学史』参照）

4　フランス、ロシヤ小説の影響と共にノールウエィの劇文学の影響も大なるものがある。イブセン、ビヨルソンの翻訳、翻案は読物としても、劇としても多くの人の知るところである。又はストリンドベルヒの作品の如き、北欧文学の特性の影響は、現代劇文学小説の展開に於て忘るべからざるものである。

5　ドイツ語文学はゲーテ、シラー、ハイネ等の作品はいうまでもなく、ハウプトマン、ズーダーマン、転じて、シュニッツラー、ホフマンスタール等に至るまで高等学校以上の必修外国語である関係からも、最も多数の読者を有し、現代文学との連絡は一層密接なものがあるが、美学・哲学等の研究が特に深い関係を有することは、英語文学の比でないことはいうまでもないことであろう。（葉山万次郎氏『独逸文学史』、山岸光宣氏『独逸現代劇曲論』参照）

6　スペイン、ポルチュガル文学は関係が薄いとしても、セルバンテス、カルデロン、カモエン、又はイタリーのダンテ、ボッカシオの昔から、ダヌンチオ、フォガッツァロ、セラオの名は熟知するところであり、最近に於けるダンテ研究の目だって多くなって来たことの如きは特に著しい現象である。

7　英語文学と同じく特に叙説を須たぬのである。英語の学習者の範囲の広いために翻訳を須たないほどであって、十八世紀・十九世紀の名編は概ね翻訳せられて居り、又ヨーロッパ文学の多くは英語の翻訳に依る重訳が多いので、直接間接にイギリス、アメリカの文学との関係が深く、特に現代文学の先駆となれる「文学界」と英文学との関係、夏目漱石、上田敏、又は坪内逍遥氏等の現代文学の展開に於ける重要なる位置を考ふる時に、他の各国の文学よりも親密であることをも附加えて置かねばならぬ。（舟橋雄氏『現代英文学の研究』参照）

以上はイギリスの読者のために書かれた小冊子に掲げたものと対照して見たのであるが、単に日本語で書かれた世界的文学の多くを所有するのみならず、特に昨年来ダンテ、モリエール、ドストエフスキー等の生誕の記念も行われ、一般の読者は外国文学・外国文学者たる感じを超えた親しみをさえもつのである。（Buckley—How and what to read参照）（有朋堂版「国語の力」、二五六〜二六〇ペ）

イギリスの読者用に編纂された小冊子（Buckley—How and what to read）をうまく活用して、世界的文学への視野を用意し、それらと、すでにわが国に翻訳・紹介された世界的文学とを比較し、なにを読むべきかについては、われわれはかなり広い世界的文学の読者であることを指摘して、各国の文学のわが国への移入・翻訳ならびに研究の現況が当時として要領よく述べられている。一つの読書情報があざやかに生かされている。その手ぎわのみごとさには感嘆を禁じえない。——もちろん、そこには、世界的文学への視野の広さと確かさとが感じられる。

当時、読書論・読書のしかたについての情報としては、たとえば、馬場孤蝶氏によって、「ブランデスの『読書論』」として、「近代文芸の解剖」（大正3年9月15日、広文堂書店刊）に、収録・紹介されていた。

これは、「オン・リーディング」という、ゲオルヒ・ブランデスの著わした、小形の六四ページ、一円五〇銭の本で、一九〇六年（明治三九）にニューヨークのダフィイルド商会から刊行された、ブランデスの読書に関する意見が述べられているものであるという。

この本では、なぜ読書すべきか、どういう本を読むべきか、また、どういうふうに読むべきかが論じられている。これらの中で、著者ブランデスは、つぎのようにみずからの考えかたを述べている。

1　「次には、どういふ本を読んだら可からうかといふ話になるが、先づ我々は何を読むかと言ふと、新聞を読む。現代では新聞を読むことが我々には必要なことゝなつて居て、新聞がいろ〳〵の智識を—それは極散漫な種類のものであらうが—我々に提供するものだといふことは、争ふべからざる事実である。新聞が毎日いろいろな面白いことを我々に教へ、多くの外の読書をする道を我々に指し示して呉れる。新聞一枚あれば、世界中のことが知れ、また毎日の出来事が知れるのである。」（同上書「近代文芸の解剖」、八ペ）

2　「世間には、本に依らずとも智識は得られるから、本を読む必要は無いと思つて居る人がある。多くの人は物を概括した本を読みたがる。即ち世界の創造から始まつて、我々の時代にまで及ぶといふやうな浩瀚な書物、所謂世界の文学史といふやうな物を読んで、広く事を知れば知るほど可いと思ふ。が、さういふ本は最も害のある本である。さういふ本を本当に書ける人は世間に一人も無い。さういふ本は人を教へるよりも、寧ろ人をぼんやりさせるものである。さういふ世界的文学史の著者は、五十程の違つた国語で書いた書物をよく知つて居るやうなことを言つて居るけれども、そんなに沢山な国語を皆覚えられやう気遣ひは無い。生れ無い前から読み始めて、何事もせず、即ち人生をも楽まず、眠りもせず喰ひもせずに、其本を出版するまで読み続けて居たとしたところで、其人の挙げ、且つ評する本の極小部分を読むだけの時しか無い筈である。さういふ著者は、自分の碌に知ら無い事を外の人に教へやうとするのである。だから、さういふ人の教へは、其人の智識と同様に不完全なものだ。

本当に人を教ふべき本は、一つの国、若くは短かい一定の時を取扱ふもので無ければならぬ。其時代が短かければ短かい程宜いといふやうな訳だ。問題が比較的狭くなつても、本の交渉する範囲が狭くなるといふことは無い。大きな、広いことに亘るといふのは、その著者が大きな範囲のことを言はうとする努力で出来るもので無

く、唯取扱ひ方の大なること、著者の見識の広いことで出来るものだ。無暗に広いことを言つたところで、深い意味のあるものでは無い。広いこと、深いことは、却つて或る意味ある小さいことを象徴的に取扱ふので、最もよく現はれるといふことが度々あるものだ。例へば、自然科学者は、虫を論じて宇宙を洞察するといふやうなことが出来るものである。」（同上書、一四～一五ページ）

3　「若い娘達は、本を読むことは自分自身を読むことだといふ言葉を用ゐることがある。彼等は自分自身の境遇、実際に稍似たことが書いてある本を好む。我々は我々自身を透しての外、物を理解することは出来ないものには違ひ無いが、我々が本を理解しやうとする時には、我々の目的は其本の中で我々自身を発見するので無く、却つて其著者が其本の中に現はれた性格を透して現はさうとして居る意味をハツキリと摑むことで無ければならぬ。我々は本を透して、本を作つた人の心に達するのである。我々が其処まで著者に就て知つた時になると、我々は屢々その人の著作に就てもつと多く読まうと思ふものである。我々は彼が書いたいろ〳〵な事を透して、ある関係が通じて居るのであらうと思ふやうに為る。それで、其著作を続けて読めば、其人及び其著作をもつと能く理解するやうになることが出来るものである。」（同上書、二一～二二ページ）

4　「事件の中心、歴史の神髄は、我々の目の前に剝き出されて居る。そんなら何故我々は本を読むべきであらうか。それは、我々が智識を増し、我々自身の僻見を砕き、段々人格を作り上げて行く為である。どういふ本を我々は読むべきであらうか、それはキツチリ我々に適して、我々を引き着け、我々を押へ付けて行くやうな本を読むべきである。さういふ本は我々に取つて好い本である。或る人が私の友達に、『貴方はどういふ本を撰ぶか、ロオマンティツクな本か、自然派的の本か、比喩的の本か』と、斯う訊ねた。ところが、その友達は『好い本だ』と、答へた。是はうまい返答である。何故なれば、お極り通りのことをする位馬鹿なことは無い。本は、我々を発達させるものが、我々に取つては可いのである。されば、我々は如何にさういふ本を読むべきであらうか、初めは好いて読め、次には批評的に読め、次には、若し出来るならば、中心点を拵らへて、それからいろ〳〵な関係を推定して行くことが出来るやうにしろ。そして最後には、本に書いてある事件の内部に潜んで居る道徳上の教へを十分に理解し、其教へを我々自身の物にして仕まふことを目的として読め。

斯ういふ風にすれば、一冊の本で、世界が我々の目前に展けて行くやうになる。我々はさういふ本を通じて、人間の天性の或る部分、即ちそこではいろ〳〵変化のある我々自身を認めるのみならず、尚また天然の変化し無い形、及び永遠の法則を見出し得るやうな人間の天性のある部分を知ることが出来るであらう。最後に言ふ、注意深く本を読むならば、我々が、為すべきことと、為ずに置くべきことを、ハツキリ感ずることが出来るやうな力を、我々の道徳上の状態に加へるに至ることが出来るものである。」（同上書、三一～三二ページ）

これらは、二〇世紀初頭のアメリカの読書論の一面をうかがわせる。なにを読むべきか、どのように読むべきかについて、示唆にとむ見解が述べられている。

この読書論の要約的紹介が当時垣内松三先生の目に触れたかどうかは、明らかでない。いまはただ、大正初期、すでにこうした紹介が

なされていたことを指摘するにとどめたい。

なお、前掲「国語の力」からの引用の中に、フランス文学に関して、吉江喬松氏「仏蘭西文学印象記」（新潮）が参照すべき文献（あるいは論稿）として掲げられていた。「仏蘭西文学印象記」は、「国語の力」刊行後、大正一二年（一九二三）五月一六日、新潮社から単行本として世に送られた。その内容は、つぎのように構成されていた。

1　南国
2　地中海
3　ヴェルサイユ
4　ポオル・ロワイヤル訪問記
5　夏休み
6　アナトオル・フランス
7　秋
8　大地の声―シャルル・ルイ・フィリップ
9　新史劇論
10　ポオル・クロオデルの劇作
11　民衆劇運動
12　フロオベエルの現実主義
13　瑞西の自然美（引用者注、番号は引用者において、便宜付したものである。）

これらのうち、12　フロオベエルの現実主義　においては、フロォベエルの表現への苦心について、つぎのように述べられている。

「またフロォベエルが、斯く微細に研究し、観察し、帰納し得たものをば表現するに当つては、一点一劃もいやしくもしない、丁度数学者が、一つの数字をも空しくすることの出来ない如く、的確、明白、簡結（ママ）な語法を用いて表はして行く。彼が的確を期するためには、常に座右に仏蘭西アカデミイの辞典を備へ、文法書と共に眠るまでにし、一形容詞を適用するに、三日を要するほどの苦心を重ねたのであつた。」（同上書、三三〇ぺ）

さて、「国語の力」では、右に見てきた、一三「何を読むべきか」につづいて、一四「如何に読むべきか」が、つぎのように説かれている。

日本文学特に現代文学と世界的文学との連絡を考へることから、文学の読方に新しい着眼点が浮かんで来る。現代文学は大体に於て四種類の類型を示す。その一は叙事文学特に小説、その二は劇文学、その三は詩、特に抒情文学、その四は試論（モウルトンはPhilosophyという）である。この区分は又これまで度々引用したモウルトンの文学形態学の基礎概念であつて、この四型が、恰も東西南北の方角のように、相互に関聯し、従ってその相互の融解をも考え得るものであるが、この立場から、日本文学と世界的文学との連絡が成立し、更に回顧的展望的に、世界文学の概念を考えることができるのであって、モウルトンがこの四型に基いて、叙事文学・抒情文学・劇文学・試論の展開に関する研究を試みたように、日本文学の形態学的研究の立場から、世界的文学を統合し、その立場から「世界文学」の研究に進む時に、この四系素の研究が、日本文学思潮の広い大い（ママ）幅を判然と示す手がかりとなり、各系素の系素づけを確保することから国文学の体系が建立し得らるゝであろう。

（有朋堂版「国語の力」、二六〇～二六一ページ）

「如何に読むべきか」という節の見だしながら、叙述されているのは、読みの対象としての日本文学をどうとらえるかを問題として、そこに文学の読みかたの新しい着眼点を見いだそうとしているのである。

垣内松三先生は、かくて、一五「対象の統一」において、叙事文学・劇文学・抒情文学・試論の四つの系列につき、それぞれ考察を加え、それをまとめて、つぎのように述べられた。

以上の四系列を相互に関聯せしめると同時にその各系列に於てその系素を統一するならば、ここに始めて、日本文学の体系的展開を明かにし、日本文学の全面に亘りて、回顧的に展望的に、その展開を認識し統一批評することができる。彼の「類型（タイプ）」に依る文学の研究は、文学をその類型によりて引裂くのであるが、これは文学の本質の作用の各方面を示すと同時に、それを中心に於て確保し集約することである。各時代の文学現象は、その中心点に沿うて分化展開するのであつて、恰も柱によりて支へられたる楼閣の各層の姿にも比べることができるのである。（小著『国文学大系』は高等学校用国文教科書であるが、日本文学の全体系を直線的平面的に排列するのでなく、立体的に建立した形に於て対象の統一を企図したものである。その編纂法を参照せられたい）。日本文学の全面をかように統一する時に、日本文学の体系的発生的なる展開が、研究の対象として心の面前に現われて来るであろう。そうして一つの作品が、その全体系の中に在りて占むるその特有の位置を示すごとく、一つの作品と他の作品との関係に於ても必然的なる連絡を示すことであろう。かくして対象は書物ではなくして、真に研究の対象たる対象となり、一つの作品もこれを日本文学の本質の展開に連繋して、その一語一句をも忽にせざる読方を要求することとなるであろう。（有朋堂版「国語の力」、二六四～二六五ページ）（傍線は、引用者。）

日本文学を読むことの真の対象として、どのように体系的にとらえていくかに、心がくばられ、それについての一つの見通しが述べられている。書物が読むことの対象であるとする考えかたの安易さが鋭く裁かれて、読むことの対象の統一的把握が目ざされているのである。

さて、前掲文章中の傍線部に述べられていた「国文学大系」は、「現代文学」・「近代文学」・「中世文学」・「古代文学」の四冊が予定されていた。これらのうち「国文学大系」現代文学」は、大正一〇年（一九二一）九月一三日に尚文堂から刊行されていた。大正一一年四月一五日には、訂正再版が、さらに同年五月三〇日には、訂正三版、さらに翌大正一二年四月三〇日には、訂正四版が出された。

この「現代文学」の「例言」には、その編纂法について、左のように述べられている。

一　在来かやうな目的を以て編纂せられた教科書は政治史的・列伝的及び類型的分類を以て組織せられたる文集であります。本書も亦教科書である以上は文集の形式に依らねばならぬのは当然でありますが、一般的教養として日本文学の全体を全景的に批評的に

見る研究の境地を造るために、文学思潮の大勢の上から材料を整頓して編纂を試みたのであります。

一　全景的の見方といふのは時代に囚はれず、又一時代に現はれたる文学の分量に眩まされないで―精神的浪費を避くるために―作品の本質を基点として、日本文学の研究に於て思料し得らるゝ適当なる準備の下に作品を整理することでありまして、編者はかくして読者諸君がその全景を直視し得る視点に立たることを希望して居るのであります。

一　この目的から日本文学の全体系を次のやうに序列して編纂いたしました。

一　合唱 Ballad dance, choralの頃――自然から人の心が目ざめた黎明に於て「いのり」も「かたり」も「働き」すらも旋律を帯びて、宗教・哲学・生活も全て歌なりし時―の文学を以て日本文学の原形 Protoplasm とし、日本文学の全体の包蔵せらるゝ文学原型と考へますので、在来日本文学史上の重要なる時期区分に属する作品に現はれたるその分化及び分化の極限に於て原型に還らんとする内心の連続に着眼して、文学思潮の流動を鮮明に現はすことを努めました。

而して次のやうな序列を試みました。即ち

1　抒情詩（個人的主観的）の生るゝ時
2　分裂より純一を求むる時
3　自照より奔放に赴く時

であります。これ等は自然の展開であり又特殊の典型であるが、日本文学思潮の全体から見ればこれを次位的に序列しなければなりませぬ。

二　文学復興より現代まで―あらゆる精神的堆積を潔く振落して直ちに霊の原郷、純真なる霊の原型に還らうとする意識が明くなり、又それより以前の全ての文学の典型が新に生まれて螺旋的に向上し、崇高・素僕・優雅・幽玄・牧歌の精神の高まりし時―恰も内外に亘れる国民生活の異常の亢奮に妨げられてこの意識は偏狭固陋となり、却つて頽廃的諷刺的の文学のためにその光を掩はれて現代まで持続したとはいへ―より現代までを一つにまとめました。特に現代文学は歴史的に前代の文学の全てを包含するのみならず、評論・小説・劇・詩の全面に亘りて所謂 International intercourse の裡に在り且、最近に於ける国民生活の事情は文学の展開を促進して新生の光景の歴然たるものがありますのでこれを別巻としました。それは広汎なる「世界文学」の研究の便宜を思つたからであります。

一　批評的の見方といふのは訓話的な客観的批評や印象的な主観的批評の弊竇に陥ることなくして直接に文学の本質を研究し鑑賞することであつて、かゝる境地を造るやうに編纂することが本書の計画の他の一面であります。わたくしは文学の本質を、所謂「内容」（文学的材料）が作者の精神の内に於て育てられて所謂「形式」（感覚的現象）に表現する個性の内面的流動の上に求めたいのでありまして、それを透視する研究の仕方は何ものにも妨げられずに先づ文学の形象を凝視することであります。この点に於て常に Moulton 教授の主張する「文学の形態的研究」の謙虚な精厳な研究的態度をこゝちよく感じて居りますので、これに私見を加へて各時代の文学を

1　Description

2　Lyric-Philosophy
3　Presentation

の綱目或は順序に編纂することによりて研究の進路を清めて見たいと思ふのであります。

此の如き着眼点から文を読む時は言語学上の学説も文学創作の主義も全て一語一句の解釈の上にも生き、併せて「文化の自叙伝としての文学」の研究を着実に進めることができると信じます。

一　本書は日本文学の全体系に亘りてその研究の境地を造るのが目的であつて自ら進んで日本文学の思潮を説くことを致しませぬ。一々の作品を透して研究を深化し展開するために予料し得る種々の工夫を加へて編纂したのみでありますが、もし読者諸君が自ら本書に於て日本文学研究の大綱を組織せられ併せてその立場から「世界文学」の研究にまで進められ文学の研究を機縁として文化の批判と個性の教養との上に留意せらるることを得ば実に欣幸とするところであります。

一　教課規程と適応するために編次・教材の選択按排・作文教授との聯絡等に注意したことは申すまでもありませんが、尚尽さざるところ到らぬところが多いことであらうと懸念に堪へませぬ。そは更に訂正増補につとめたいと思ひます。（以上、「国文学大系　現代文学」、「例言」、一～六ページ）

この「例言」は、大正一〇年（一九二一）八月三〇日に、著者垣内松三先生によって記されており、編集については、大川茂雄氏の助力に負うところ多かったことが述べられている。

「国語の力」が執筆され、刊行される前に、こうしたテキストがまとめられ、そこには垣内松三先生の日本文学の全体系・全景をとらえていく考えかたが示されていた。ここに垣内松三先生の「国語の力」のまとめ、とりわけ、五「国文学の体系」まとめへの土台の一つが見いだされる。

さて、「国文学大系　現代文学」は、つぎのように構成されていた。

1　山路（「草枕」）　夏目漱石
2　金字塔（「欧米文明記」）　黒板勝美
3　紫にしづめる谷（短歌一〇首）　尾上柴舟
4　エパミノ、ダス（「西洋史新話」）　箕作元八
5　小品四題
（1）「盲目」　大塚楠緒子
（2）「修善寺紀行」　高浜虚子
（3）「城の崎にて」　志賀直哉
（4）「霜月」　吉江孤雁
6　頼朝（「源頼朝」）　山路愛山
7　戦の跡（「日本から日本へ」）　徳富健二郎
8　クラウド（「ユーゴー小品」）　森田思軒
9　新時代の権化（「近世日本国民史」）　徳富蘇峰
10　樺の林（「二葉亭全集」）　長谷川二葉亭
11　与謝蕪村（「近世絵画史」）　藤岡作太郎
12　子規句抄（二〇句「子規句集」）　正岡子規
13　残雪（「残雪」）　田山花袋
14　塩原の山水（「金色夜叉」）　尾崎紅葉
15　海へ（「海」）　島崎藤村

16 偶感　蒲原有明
17 思ひ出の記（「文は人なり」）　高山林次郎
18 愛（「病間録」）　綱島栄一郎
19 小さき者へ（「小さき者」）　有島武郎
20 朱子学派の特質（「日本朱子派之哲学」）　井上哲次郎
21 象徴の真意義（「意識の問題」）　西田幾多郎
22 海と人（ボードレエル―悪の華「海潮音」）　上田　敏
23 古典新眼（「東京日日新聞」一〇、四、二七）　幸田露伴
24 （「文芸思潮論」）　厨川白村
25 第二維新の機（「日本及日本人」）　三宅雪嶺
26 感想十題
（1）「小さな灯」　有島武郎
（2）「筆のすさび」　大町桂月
（3）「新らしき村の生活」　武者小路実篤
（4）「文芸往来」　菊池　寛
（5）「墨汁一滴」　正岡子規
（6）「内村全集」　内村鑑三
（7）「婦人の友」　阿部次郎
（8）「回光録」　綱島梁川
（9）「仏蘭西紀行」　島崎藤村
（10）「大戦後の世界と日本」　徳富蘇峰
27 文化の威力　得能　文
28 国体・国是・思想問題（「国体国是及現時の思想問題」）　建部遯吾
29 大死一番（「大戦後の世界と日本」）　徳富蘇峰
30 光あれ（「光あれ」）　姉崎正治
31 南瓜（短歌一三首）　長塚　節
32 出家と其の弟子（「出家とその弟子」第四場）　倉田百三
33 日蓮（「法難」）　坪内雄蔵
43 近代劇と世界思潮（「近代劇大観」）　宮森麻太郎
35 ファウスト（「ファウスト」）　森林太郎
36 ゴルスワアツイの社会劇（「文芸往来」）　菊池　寛
37 名立くづれ（「脚本七部集」）　岡本綺堂
38 童話・童話劇・民謡（「近代文学に現はれたる超人」）　高橋禎三
39 幸福（「婦人之友」）　島崎藤村
40 かなりや（詩五編）　西条八十
41 現代日本の文芸と世界思潮（「解放」）　太田善男

これは旧制高等学校・専門学校などの国語教科書として編修されたものであった。単なる雑纂集成でなく、当時として意欲的な体系的集成が試みられている点は、注目させられる。

一九

つづいて、「国語の力」の第五章「国文学の体系」には、その二一に、「再び『読む力』に就いて」が置かれている。ここでは、「読む力」について、つぎのように述べられている。

1

これまで対象の統一に於て取扱った「読みもの」は純文学に限ら

れたのであるが、読む作用は素よりそれに限られるのではない。科学・哲学の論文又は聖典等も亦読む作用の対象であることは勿論である。唯、文学の立場に於てはそれ等を素材として取扱ふことができるのであり、「国語」に於ては純粋なる表現形式としての文学を主なる対象とするために、自ら純文学に偏することにならねばならなかったのである。併しながら「読む作用」に就いて考へる時に、特に文学の一面にのみ偏するのは、専門家の選ぶ方向であって、一般的なる「読むこと」は野を走る水のように、その赴くまゝに文化の分野の各方面に向うのであるから、その領域を局限することなく、できるだけ文化意識の各系素の結晶である読みものを読破して、経験を多様にすると同時に其の統一を求めて、自己を確立し修正し充実する精神を生かす作用であらしめねばならぬ。

若干の愛読の書を所有して常に照心の光を心の前にかゝげることは「読むこと」の極致である。（事務的な「読むこと」に就いてはいうまでもない）。併しながらそうした「読むこと」に於ても、「読むこと」はそれにも追従するものでなくして、それを乗り越して自己の中に自己を創造する営みでなければならぬ。この要求から自己の確立を「読むこと」の第一着手として又その終りとも見るのである。前に幾度か、眼の着けどころと心の据ゑ方に言及したのは読方の態度に関してその基礎づけの顧慮を求めたのであって、その立場から無限に進展して已まない創造の作用が「読むこと」の本質である。読方はそれを自己の放恣に打任せずに方法的に厳粛化することであって、読方・解釈・批評のいかなる学説も考察も、この問題を生かしてくれるものでないならば無用の思弁に過ぎないであろう。この地点まで到達するために、これまで読方の心理的研究又は批評主義論の所説をも顧みねばならなかったのであるが、感覚的要素や表象や臆断の上に立った学説の如きはこゝに至りて消え去らねばならぬのである。（有朋堂版「国語の力」、二八〇―二八一ペ）

2

利休が或人の茶秘事を問えるに答えて「茶は服のよきように、炭は湯のわくように、花はその花のようにいけ、夏は涼しく冬は暖にする外秘事はない」と謂った。その人不興して「それは誰も合点の前のこと」という。休重ねて「合点の前ならばそのごとくして見たまえ、我等は門弟子になろう」といえるを、笑嶺和尚がその座にありて、これを聞いて「休の答え至極せり」と挨拶せられた。「読むこと」も亦「読むこと」の外何物もないといえるのであろう。笑嶺和尚の語の中に「三歳の童もこれを知りて、八十の茶人もこれを行うこと克わざるべし」と謂ってあるのも面白い。白居易が鳥窠禅師を訪ねた時、例の如く樹上に坐禅して、ゆら〳〵と居睡りをして居る。「和尚々々危いではないか」と驚かすと、禅師は「そんな処に立って大丈夫だと思って居るお前の方がもっと危い」と喝せられたことも想い起される。誰れでもよく心得て居る「読む」ということをその作用の本質に於て考えることなく、表面的な観察を根拠と信じて、それを論難・分析・説明し、その上から打建てられた学説を確実な根拠と想って居るものは亦、鳥窠禅師の一棒を喫せねばなるまい。（有朋堂版「国語の力」、二八一―二八二ペ）

3

読むことを確実に基礎づけるものは、自己の心の据え方と眼の着

け方である。心の据え方は学説から学説に漂泊するぐら〳〵した心の置き処から生ずるのではなくして、唯真実の自己を求むる要求に於てのみ得らるゝのであり、その視点よりのみ目標が展望せらるゝのである。ペーターが、環境の研究の終ったところから批評が始まるといったのもこのことをいうのであろう。これを外に求めないで内に内にと還って求むる内面的統一の根柢に、動かざる心の立ち処を選定して、その立場から無限の世界を展望することであらねばならぬ。我々が「読むこと」に就いて感ずる驚異は、かくの如き作用の上に関るのであって、読方・解釈・批評の問題は、文化意識の中心点に立ちて、自己の奥より産出する探求の精神の方法的根柢を求むることに在るといわねばならぬ。（有朋堂版「国語の力」、二八二〜二八三ペ）

4

唯こゝに附言しなければならぬことは、不軽が己れを罵るものをさえ礼拝したように、いろ〳〵の立場から行われる研究を尊重し、これを摂取し克服し合一して、一々に生命を与えなければならぬ。要はそれ等の研究の帰結を転回して、もっと根本的な統一に総括することであって、決してそれを襲むことではなく、それを生かして基礎を確実にすることであらねばならぬ。できるだけそれ等の研究を綜合し統一して、もっと厳粛なる目的のために勢を加えるものたらしめねばならぬ。（有朋堂版「国語の力」、二八三ペ）

5

「読むこと」を、常に謙虚にして厳粛なる求道の精神に充ちたものであらしめることは、自己の自律、理念の制約に依りてのみ可能である。利久の茶談に因みて、集雲庵の露地門頭の七則を挿みて、その解説に代えたいと思う。

一　賓客腰掛に来り同道の人相揃はば板を打て案内を報すべし
一　手水の事専ら心頭をすゝぐを以てこの道の肝要とす
一　庵主出請して客庵に入るべし庵主貧にして茶飯の道具偶はず美味も亦無し露地の樹石天然の趣其心を得ざる輩はこれより速かに帰り去れ
一　沸湯松風に及び鐘声到らば客再来湯相火相の差となること多罪
一　庵内庵外に於て世事の雑談古来これを禁ず
一　賓主歴然の会巧言令色入るべからず
一　会の始終二時に過ぐべからず但、法話法談に時うつらば別外

（南坊録）

露地門頭にしてかくの如く開示し、歩々悠然として大道に踏み到らしめんとする深い用意は「読むこと」の門頭に於ても掲ぐべき至極の銘であると思う。（有朋堂版「国語の力」、二八三〜二八四ペ）

6

読みものを選択する自己も、読方に於て主張する自己も、目前の自己ではなく、自己の内面に於て自己を否定し、自己を提撕し、断乎としてそれを決定し宣言することのできる自己であらねばならぬ。「読むこと」は何人も知り何人も行うことであるが、無限に向上して己まない自己を読む自己に想い到らば、新たに「読むこと」に就

いての驚異を感ぜずには居られないであろう。無用の思弁に心傲れる自己の心頭に冷水を飛ぎて、澄み切った心の中より輝く光に読むものを照らして、それを読まねばならぬ。この立場から見る時に、読方教授の問題も特に多くの言を用ひることを要しない。茲に二たび「賓主歴然の会巧言令色入るべからず」を録してそれに換えたいと思う。（有朋堂版「国語の力」、二八四～二八五ぺ）

以上、「読む力」についての叙述を、六つにわけて記したのは、原文の段落どおりではなくて、その内容にしたがったまでである。

「読むこと」の対象領域の拡大、「読むこと」の極致、「読むこと」の本質、「読むこと」の基礎づけ、「読むこと」のありかた、これらのことが深く掘り下げて説述されている。垣内松三先生の「読むこと」（読む作用）についての思索の到達水準がここに見られる。

「読むこと」における自己確立の問題、「読む作用」の創造性の問題、「読み方」の方法の厳粛化の問題など、「読む力」についての垣内松三先生の思弁は、徹底してなされており、「読むこと」・「読み方」の原論としての実を備えたものとなっている。

前掲4の補説（附言）も、垣内松三先生の学究としての大きさと誠実さとを示すものとして、注目させられる。

垣内松三先生の「読むこと」原論に対して、当時ほぼ同じ時期に論述されたものに、阿部次郎氏の「読書の意義とその利弊」（大正一〇年三月一二日記述）がある。これは後、阿部次郎氏の論集「人格主義」（大正11年6月15日、岩波書店刊）に収録された。

論考「読書の意義とその利弊」は、四節から成り、つぎのように構成されていた。

一　まえおき—読書の意義を改めて考えなおしておく必要
二　読書における体験の意義と役割
三　読書における同化のありかた
四　読書における比較の問題

この論述の中で、阿部次郎氏の強調している点は、つぎのとおりである。

1

読書は体験を予想する。自ら真剣に生活し真剣に思索してゐる人にとってのみ読書は效果がある。読書は吾々の思索と体験とを補ふことは出来るが、之に代ることは出来ない。（同上書、四〇一ぺ）

2

読書の意義を考へる者は、先づその価値の限界を考へなければならない。吾々にとって最上の意義を持ってゐるのは、生活であって決して読書ではない。読書によって珍らしい智識や豊富な記憶や博学の誉れなどを得ることではない。此間の関係を転倒して、読書に無条件の価値を置くのは、寧ろ読書からその正当な価値を奪ふ所以に過ぎないのである。（同上書、四〇二ぺ）

3

吾々の生活の発展の最初の地盤となり、吾々の思索の第一の出発点となるものは何であるか。それは吾々自身の体験である。吾々自

身の体験の外には何処にもあることを得ない。吾々の最初の体験は固より完全なものではないが、その中に隠れてゐるものを明るみにひき出し、その中に潜んでゐる矛盾と戦ひを重ね、その中に具はつてゐる内面的傾向を次第に押し進めることによつて、吾々の生活は始めて発展し、吾々の思索は始めて真理に接近する。（同上書、四〇三～四〇四ペ）

4

生活に於ても思索に於ても、仮初にも堅実な歩みを初めようとするならば、吾々は自分の体験を信じてこれを尊重することを学び知らなければならない。読書の価値も亦この信念の上に立つて始めて発揮されるのである。

この信念を基礎としないとき、読書は吾々にどのやうな弊害を与へるであらうか。第一にそれは善悪美醜正邪に対する純朴な本能を紊して、これを混乱させ、これを痲痺させる。全然文字を知らぬ田夫野人が、半可通の読書子よりも人情の美醜を解し善悪正邪に対して彼一流の判断を持つてゐるのは、彼等が兎に角読書によつて迷はされぬ本能を持ち続けてゐるからである。第二に体験の根柢を欠いてゐる読書は、吾々の思考力を薄弱にする。吾々は雑多な意見を聞きかじることによつて自分自身の判断がない人間にされて了ふ。これは凡庸な学者が往々にして陥り易い弊害である。さうして第三に、吾々は前に云つたやうな種々の理由によつて、結局吾々の生活そのものの統一を奪はれ、生活そのものの力を失ふやうな恐ろしい破目に陥る。吾々の生活には、踏みしめるべき大地もなく、歩み出すべき出発点もないものとなつて了ふ。この点に於いて、誤れる読書によつて今日の生活が如何に損はれてゐるか、他人事ならぬ吾々自身の問題として、吾々は深く省るところがなければならない。（同上書、四〇四～四〇五ペ）

5

たゞ読書の意味は吾々の体験を基礎としてのみ成立つものであるとすれば、どんな良書も、こちらの体験が足りない限り十分に理解することが出来ないのはやむを得ない。特に偉人がその一生の体験と思索とを籠めたやうな大作になると、それは吾々の体験と思索とが大きくなればなるほど、どこまでも益々大きく見えるであらう。幾度読みかへしても常に新しい味を吾々に味はせるであらう。この意味に於いて吾々が本当に良書を理解しようと思ふならば、吾々は先づ自分自身の生活を大きくしなければならない。吾々が全力を尽して考へたり味つたりしてもとても理解し得ないやうな本に遭逢したならば、吾々は暫くその本を離れて直接の人生に帰つて行くがよい。さうして其処で得たものを携へて、適当の時期を見はからつて再びその書物に帰るがよい。その時吾々が直接の人生から携へて来たものは、その書物を理解するために大に裨益することがあるであらう。自己の成熟を待たずに無闇にこれにかじり付くのは極めて愚策である。自然科学の知識の根原が自然にあるやうに、人間智の根原は凡て直接の人生にあることを忘れてはならない。

書を読むとは心を読むのである。自己の心を読むことを知らぬ者が、どうして他人の心を読むことが出来よう。（同上書、四〇七～四〇八ペ）

6

一つの本を本当に理解するためには、吾々は其処に書かれてある

世界に根本的に同化する力を持つてゐなければならぬ。その世界は価値の少い世界であるかも知れないし、価値のない世界であるかも知れないが、兎に角その世界に一旦同化して見なければ、吾々にはそれが価値のない所以も、価値の少い所以も、本当に理解することが出来ないのである。まして底なきまで底の深い良書を充分に理解するためには、その中に溺れる程度までこれに潰つて見なければならないのは云ふを須ゐない。併しこの理想は容易に実現し難い理想である。吾々は唯全力を尽してこれに接近することを得るだけである。それは完全に自己の気まぐれを殺して、充分に他人の立場に同化することが、吾々にとつて非常に困難なことだからである。併し如何に困難であつても、吾々は、此道を通らずには、本当に他人の心境に徹することが出来ない。積極的に云へば同化、消極的に云へば、自己の気まぐれを殺すこと—これが読書道の第一義諦である。（同上書、四〇八～四〇九ペ）

7 又書を読むについて特に注意することを要するは言葉の意味である。言葉はたゞ響きに過ぎない。吾々にとつて重要なのは、その言葉の意味する事柄若くは感情である。（同上書、四一二ペ）／思想は生物である。言葉は唯これを暗示する一つの手段に過ぎない。正確に言葉の現在の意味を摑むこと—これも亦著者の真精神に参加するための欠く可からざる条件である。（同上書、四一三～四一四ペ）

8 読書の真髄は書中の世界に同化するところにある。併し読書に於ける同化の意味を正当に理解して置かないと、吾々は此処でも亦読書によつて大害を受けるであらう。読書とは例へば夢に富士山に登るやうなものである。それは正夢であつて、吾々の夜毎に見るやうな紊れたとりとめのないものと同日の談でないことはいふ迄もないが、兎に角吾々が、読書によつて偉大な世界に同化するといふことは、決して吾々の生活の全体が永久にその高みに攀ぢのぼつてゐるといふ証拠にはならない。その夢が一度醒めれば、吾々は依然として麓に彷徨する憐むべき俗界の子に過ぎないのである。固より読書の正夢は、吾々の登攀の志を刺戟し、登攀の途を吾々に教へ、且つ夢を見ることそれ自身が少しづゝ吾々の現在の立場を高めて行くであらう。併し登攀の志を全くするには、吾々は自己の生活を提げて実際山登りの困難と戦つて行かなければならない。（同上書、四一四ペ）

9 茲に於いて必要となるのは比較の見地である。一旦同化した書中の世界を厳正に自己の現実と比較して見ることである。書中に於いて見た登高の夢と比較して、自己の現在の立場の低さを反省することである。不断にこの努力を持ち続けることによつて、吾々は始めて「浮かさずに」書を読むことが出来るであらう。この態度は二つの方向に於いて吾々の読書の生活を深める。一つには、それはおのづから著者の制作の心境に対する吾々の洞察を深くするであらう。彼は如何にしてこの偉大に到達したか、此の如き花を咲かせるために彼は如何にしてその根と幹とを育てたか—此等のことが吾々の注

意を要求する。「眼光紙背に徹する」といふ境涯も恐らくこの道によつて始めて獲得されるのである。さうして第二に、それは読書と生活とを一層密接に連絡させる。この道によつて読書は始めて吾々の生活の根柢を衝く力となる。読書は吾々の生活する精神的雰囲気の重要な一要素として、師長や朋友と同様の位置を占める。偉大なものとの接触と比較とによつて吾々の生活は深く刺戟される。（同上書、四一六～四一七ぺ）

10

併し比較の道にも亦一つの危険がある。自らその方面の野心を持つてゐる者は特にこの危険に陥りやすい。その危険とは、同化するに先つて力競べをしようとする誘惑である。静かに対象が与へるところのものを読み味ふ前に、空虚な興奮に身を委ねることである。かくて都会生活をするものの焦燥と神経質とは、又野心に燃える読書家の心をも蝕毒する。「何だこんなもの」と思つたり、「とても叶はない」と思つたりする心持が、書中の世界との品位ある交際を不可能にする。街頭に出逢へる二匹の犬のやうに、唸つたり吠えたりしながら書物を読むのは、矢張読書の外道である。その結果は、理由なき高慢か、浮薄な追随と模倣か、それでなければ元気の萎縮となつて了ふであらう。あまりに偉大な者を傍に持つことは、心掛の悪い凡庸者流には、往々にしてこの悪影響を与へる。ミケランジエロが同時の伊太利美術界に与へた影響の一面には、確かにこの意味が籠つてゐた。書を読んでその弊を避けることが出来るためには、吾々は素直な遜つた心と共に、独立して犯されない自信を持つてゐなければならない。（同上書、四一七～四一八ぺ）

これらは阿部次郎氏自身の読書生活・思索生活・学究生活から導かれた、独自の読書論の核心である。借物でない、独創的な論として、読書の意義とその利弊が的確にかつ平明におさえられている。わが国の近代読書論史上、阿部次郎氏の読書論は、そのたしかさ・深さ・鋭さにおいて、最高水準にあるといえる。

論考「読書の意義とその利弊」は、「国語の力」の執筆に先立つてまとめられているが、垣内松三先生の「国語の力」に述べられている〃読む力〃論とは、ほぼ同じ時期（一九二〇年代初め）に成り立つたものとして、好一対をなし、また好対照をもなしている。ともに、当時の読書論の到達しえた極限を示しえている。

因みに、阿部次郎氏の「読書の意義とその利弊」は、戦前旧制中等学校の国語教科書に、その一部が（たとえば、「読書の意義」として）採録されていた。わたくしもまた、旧制中学時代、国語教科書（八波則吉氏の編修にかかる）に採られていた、「読書の意義」を学んだ。「読書は体験を予想する。」という一文は、それ以来ずつと脳裡に焼きつけられて、とりわけ印象深い。

垣内松三先生も、阿部次郎氏も、ともにすぐれた読書家であつた。主体的で独創的な読み手であつた。両氏の読書論には、おのずとその読書実践そのものがにじみ出ている。したがつて、そこに展開している世界は、大きく広く、かつ深い。「国語の力」が開花し結実するにあたつては、その土壌がゆたかであつて、種子を発芽させ、それを生育させていくものがすでに蓄積されていたのである。

（昭和49年8月28日稿）（本学教授）